町史とっておきの話 198

神奈川大学非文字資料研究センター協力研究者
ルシーニュ・フレデリック

◀只見町を代表する語り部・梁取源左衛門さん

国際化の可能性

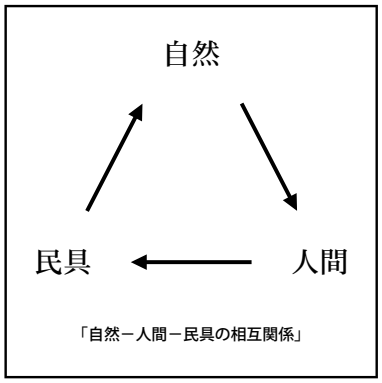
神奈川大学が2006年から開発し始めた「只見町インターネット・エコミュージアム」は、現在「只見町の風景」「只見町の屋根葺職人」「自然と暮らし」「只見町所蔵民具検索」の四つのコーナーから構成されています。「只見町の風景」では空間から只見の民俗に接触することができ、「自然と暮らし」では時間から只見の生業を一年間のサイクルを通して親しむことができます。「只見町の屋根葺職人」は一種の特別展です。「只見町所蔵民具検索」では民具カードのデータベースを展示しています。

現在プロトタイプに過ぎない只見町インターネット・エコミュージアムは、これからどのような形で発展させるべきでしょうか。「只見町の屋根葺職人」コーナーを「特別展」コーナーに変えれば、屋根葺職人と並んでほかの常設展や臨時的な展示を追加することがいくらでもできます。「只見町所蔵民具検索」では、2，333点の国指定重要有形民俗文化財である民具コレクションを中心に掲載していますが、将来すべての民具カード（約9，000点）を展示することが可能です。さらに民具の検索方法を工夫すれば、民具検索はより分かりやすく面白くなることが期待されます。「只見町の風景」にはスポットを増やせていければよいと思います。「自然と暮らし」では、写真やビデオなどのビジュアル的な資料をもっと提示する必要があるでしょう。

民俗とは直接関係なくても、只見町の社会変化を戦前からたどれるコーナーを新しく設けることも考えられます。たとえば、写真やインタビューなどの資料を基礎にして展示できたら、さらに面白くなるでしょう。私は小林の梁取源左衛門さんのインタビューに立ち会ったとき、その戦争体験に深く感銘しました。個人的な話ですが、私のお祖父さんは第二次世界大戦中にレジスタンスに参加していました。名誉のある戦闘活動にかかわっていたと思うのですが、お祖父さんからは戦争体験をほとんど聞いていません。戦闘のほら話みたいなものはなおさらです。つまり、戦争の記憶はあったが、簡単に語れなかったと推測しています。只見に来て、源左衛門さんの戦争体験を聞いたとき、良心的な人が戦争体験を簡単に語れないことはフランスと日本に共通していると感じました。第二次世界大戦時、フランスと日本は敵国だったということがフランス人は今でも意識していますが、山間地出身のお祖父さんがどのような心境で戦争に参加したかという記憶を穏やかな表情で語られる源左衛門さんのお話とその顔は私にとって何ともいえない経験でした。これはぜひ海外、フランスに知らせなければ、と思いました。元敵国との平和は、このような経験に基づいて築かれると確信しました。

エコミュージアムの役割は、自然環境や生業の営み、つまり地域文化の背景のなかで歴史を語っていく方法が有意義なのです。それは実は民俗学が探った研究分野でもあります。

図式に示したように、民具は自然と人間とが一つの三角形の関係性をもっています。また、エコミュージアムの原点は環境学です。今まで民具が教えてくれる人間の文化的要素を強調しましたが、自然との関係性を忘れないで、自然首都・只見にふさわしいエコミュージアムを国際化していきたいと思います。只見町の皆さまには大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。



「自然－人間－民具の相互関係」

▲カンゼンブーシをかぶった筆者